資料２

第三回いじめ防止等対策検証会議　意見一覧

【氏家会長】

●外部クラウド等の利用に関する仙台市全体のポリシーの問題，或いは違う方略も考えて，今の時代の児童生徒の声にマッチしたSOSの出し方を受けとめる方法があるのではないか。
●hyper-QUは継続してやることによって，クラスの人間関係等が把握されるものである。
●SCについて，先生方と意見交換や連携をとるような時間がないという話を聞いた。ガイドラインというか考え方というか，よりよく児童生徒のために，或いは先生方が機能するための考え方というものを示すべきである。仙台市教委などの方が，SCやSSWに，こういうふうにして欲しいということは踏み込んで意見を言ってもいいのではないか。
●発達障害の問題について，教職員にまだまだ浸透していないのかもしれない。仮に浸透していたとしても，多様さがあるからわからないという部分もある。発達障害についての知識はまだまだ求められる。
●SNS利用のルールについて，学校でやれること，できないこともあるのだという話で，SNSについては家庭に是非お願いしたいという意見があった。今後，いじめをなくそうと思うのだったら，学校や教育委員会だけではなく，やはり仙台市全体で取り組んでいく必要がある。学校はやれるところとやれないところがあるのかもしれないというところだけは，はっきりさせておいたほうがいい。
●アンケートは，実数把握をする目的の調査，先生方が今日明日関わるべきものとは違うものであり，そこを考えなければいけない。
●いじめを防止しようというキャラクターの作成など，工夫している学校があることを，私たちは誇りに思っていい。そういう生徒たちが本当に，この学校で学んでよかった，この地区でよかった，仙台市でよかったと言えるように，児童生徒と先生方のバックアップを続けていきたい。

【齋藤委員】

●いじめ問題で，SC，SSW，SLの力を借りましょうとなっているが，活用が少ないということは，学校の認識がまだ少し足りないということである。いじめハンドブックにも例示が出ている。
●アンケート対応は，確かに，低学年になるほど件数は多いが，保護者，子供，教員のそれぞれによって感じ方は違う。難しい問題である。
●いじめ対策専任教諭や児童支援教諭など，人的な配置はありがたい。
●ヒアリング結果から，ステーションはいじめの未然防止として有効であると分かった。ステーションは中学校中心の開設であるが，小学校にも設置すべきである。
●アンケートは有効である。手書きのアンケートを書いた場合に，それを消したり書いたりした，そういう跡も大切である。一方で，手間の部分を何とかできないかと感じている。
●hyper-QUについては中学校でしか，予算がついておらず，小学校ではhyper-QUのような子供たちの生活状況を把握するアンケートを行っている。そういうアンケートがすぐに広がらなくても，少しずつ小学校にも広がっていくといい。

【庄司副会長】

●仙台市が令和3年度に実施したいじめ防止等対策である36の事業が学校にとってはいじめ対策として整理されているものではないと感じた。学校の方では，そもそもその事業を知らなかったり，その事業の意図，或いは活用の仕方が伝わっていなかったりする。どういうふうにしたらきちんと伝わり，或いは学校側のニーズを市教委や市の方に反映してもらい，必要な人員や予算を手配してもらえるかというところが大事。

●学校外専門職について，いじめ対策として役に立っているという意見ではなかった。重大事態の調査委員会から，いじめ対策としてSCやSSWを効果的に活用してくださいと提言が挙がっている。市教委が意図しているところと学校の使い方にもずれがあるのではないか。
●学校が行っている独自のアンケートと，市に報告が必要とされるアンケートの兼ね合いをどう連携させるのか。
●学校独自の取組というのを考えるときに，こういう取組をやっていますよというのを共有することがいいのか，それとも奨励していくという形で振るのか。
●SNSのトラブルはいじめだけだというふうに，誤解を与えるような方向性で検討してはいけない。

【古川委員】

●現場の先生の多忙さを実感し，いじめの芽を摘むためのアンケート調査も，かなり負担になっていると感じた。集団で生活していると，どうしてもいじめの芽が出ると思うが，それを先生方がいかに早く気づけるかが大切であり，事務的な業務に忙殺されてその芽に気づけないという状況は解消しないといけない。クラウドを活用して進められれば，現場の負担感というのは，もっと減らすことができるのではないか。
●学校教員と学校外専門職の双方のそれぞれに対する期待ギャップを感じ，なくすことができれば，より効果的な運用ができるのではないか。
●いじめアンケートについて，マークシートを読み取る方法は，結局，紙ベースなので，それはまた回収や管理で手間がかかるのではないだろうか。個人情報と回答が紐づかないようなシステム上のところで何とかならないのだろうか。
●一人一台持っている端末を家に持って帰って，その端末を保護者の方と一緒に見ながら，やっては駄目なことを一緒に考える時間ができればいい。

【本図委員】

●デジタルノートアプリケーション（OneNote）を活用して先生たちがつぶやける仕組みを導入している学校があった。効率よく情報共有がなされており，いじめ対策とGIGAスクールを今後補強していくことは必要である。
●各学校のいい取組みについて，学校長同士の研修等，いろいろな場面で効率よく共有できるような仕組みができるといい。
●学校外専門職の活用について，ある意味役割分担されていて，学校外専門職の方々がヘビーな事案をフォローしてくれているので，教職員は教育職として声掛けするべきところへの対応ができるという構造となっている。
●SCの資質なのか，学校の方の問題なのか，そこはもう少し丁寧に見ていく必要がある。SCに，きっちり伝えた方がいいのか，学校でもう少しやりようがある部分もあるのか，丁寧に考えたい。
●仙台市の学校にも，補助がつくからhyper-QUは1回使っているが，感度からするとアセスの方がいいと言って使っているところもある。宮城県では，きずなシートといって，子供たちの様子を簡単に集計できる独自のものがあるので，仙台市で仙台市版のアセスを開発してもいい。
●いじめアンケート対応で，一概には言えないが，低学年児童の対応が大変である。先生方の経験値からすると，そこまで対応が必要ない（日常生活で指導できる）ケースでも，アンケートで発覚した場合は電話対応等の時間が負担となっている。
●いじめ対策専任教諭，児童支援教諭のおかげで，いじめ対策が機能しているというヒアリング結果が得られた。費用対効果から言っても，施策全体で有効であると考えられる。

※SC：スクールカウンセラー，SSW：スクールソーシャルワーカー，SL：スクールロイヤー